

江田牧場の「たま系」を通して学ぶ 系統牛母集団の基盤造成の重要性について

古好 秀男

「たま」と呼んでも、気持ちよく喉を鳴らしたり、遊びで「たま」を取る猫の事ではありません。これは 岡山県新見市哲多町大野の江田好恵さんの両親が娘の高等学校卒業記念に家畜市場で黒毛和牛の繁殖雌子牛を2頭買いつけ、飼養管理の一切をまかされたことから数えて苦節42年間に渡り和牛改良一筋に情熱と意気込みを掛けて築き上げて来られた黒毛和牛の繁殖系統牛の「たま系」のことです。

その後、昭和47年(1972)にご主人の英明さんと結婚されてから、二人三脚で繁殖和牛飼育に専念した期間には、世界的な経済不況の影響から子牛価額の不安定な時期をも乗り越えて到達した結論は、優秀な和牛子牛を連産するためには体型・資質に優れた繁殖基礎雌牛の系統造成が和牛経営を左右する最も重点な課題であると気付かれたのです。

今から24年前の昭和60年(1985)に初めて江田牧場に「第35たま」を繁殖基礎牛として導入されたのです。生まれてくる子牛を通して研鑽をしていく間に、子牛の全体の伸び・深み・骨格・成長速度・販売価格・連産性等、「たま系」の産子の素晴らしいことに気付かれた江田ご夫妻の黒毛和牛を見る観察力と先見性の眼力は只者ではないと思います。今日では、図1に示す通り飼養頭数5頭の内、繁殖和牛3頭・育成1頭は「たま系」で占めています。また2図に示す通り、江田牧場で生まれた産子の36頭に「たま系」と名付けて全国に送り出し家畜市場で全国の購買者や関係者から高い評価を受けて認識され、和牛改良に大きく貢献している素晴らしい功績には誰も異論はあるまい。

特に驚くことは、「第35たま」は、平成13年廃用時の16才で15産し全国和牛登録協会から平成12年度連産牛表彰を受けています。さらに「第35たま」の8産目の産子で「第43たま」は、15才の13産(E

Tを除く)で全国和牛登録協会から平成19年度連産牛表彰を受けている実績は、賞賛に値すべきものがあります。

全国和牛登録協会は、従来は全国和牛共進会を昭和28年(1953)から5回開催されていますが、わが国の農作業形態の改善から農耕用機械機具の急速な発達をしたことに伴い、農作業供用の和牛が肉用牛として位置づけられたことから、産肉能力改良を目的として全国和牛能力共進会に名称を改称されたのです。そして、第1回全国和牛能力共進会が昭和41年(1966)に岡山県で開催されて以来43年の間に9回の全国和牛能力共進会が行われたのです。その間、江田牧場からは岡山県代表として、平成14年(2002)に開催された第8回目(岐阜)に出品し雌牛群8区で優等賞5席を獲得しています。

特に平成19年(2007)に開催された第9回(鳥取)では2回連続で出品して、系統雌牛群4区で宮崎県の「奥高系」、鹿児島県の「しらき系」に次いで岡山県の「たま系」が堂々と優等賞3席に入賞するなど、全国の黒毛和牛関係者に岡山県の「たま系」の名声を轟かせて認識される輝かしい実績を残しています。

勿論、江田ご夫妻も全国和牛能力共進会が目的で黒毛和牛を飼っている訳ではありませんが、和牛の能力を研鑽するために5年に1度開催される全国和牛能力共進会には最大の情熱と関心を持たれています。さらには、平成24年10月25日～29日に開催される第10回全国和牛能力共進会長崎大会に岡山県が黒毛和牛改良に総力を上げてエントリーをするならば、黒毛和牛繁殖農家は勿論のこと、関係者が黒毛和牛振興のために、闘志をむき出して強烈にチャレンジする情熱と闘志が何よりの黒毛和牛振興に成るのです。

これまでの全国和牛能力共進会の系統繁殖雌牛の上位入賞系統を検証して見ますと、大

岡山畜産便り 2010.03

分県の「第7ふゆ系」、島根県の「彦右衛門蔓系」、兵庫県の「しか2系」、広島県の「ばば系」、鳥取県の「しば系」、長崎県の「ちひろ系」、福島県の「さつき3系」、岩手県の「ますお系」、岐阜県の「くらいやま系」、宮城県の「第2横利系」等、並み居る強豪に岡山県出品和牛が競り勝つには、並大抵の努力では上位入賞は不可能だと思います。

次回の長崎大会の選抜には、岡山県の選抜選考委員会は、一回、全共を経験したことのある系統牛群以外の系統牛群を出品対象とするため、実績を持つ「たま系」以外の候補系統牛から選抜することを考えており「はなや系」、「かんげつ系」、「はつひめ系」、「はつはな系」、「さわだ系」の5系統の中から選抜しようとしています。しかし系統選抜を事務的に判断をするのではなく、上位入賞の良否は岡山県の黒毛和牛振興において将来的に大きい影響力があることを考慮して、本会の認定で出品条件の範囲内であれば、この際「たま系」も鳥取大会と同じ「たま系」の牛を出品する訳ではないので、岡山県が誇る「たま系」も選抜候補に入れての6系統で検討するのが最適だと思います。さらには、将来の効率的な黒毛和牛の繁殖母集団の交配の組み合わせを肉質改良がわから検証してみますと、本来、黒毛和牛が肉用牛と位置付けられて以来、昭和40年代（1965）頃から全国各地で霜降り肉質を追求する黒毛和牛の改良が本格的に展開され、購買者が全国の家畜市場に出向いて、優秀な繁殖基礎雌牛や種雄牛を買い集め改良に没頭してきた結果、現在では、全国で飼育している黒毛和牛の系統を4代祖まで分析して検証してみると、種雄牛と繁殖雌牛の殆どが何らかの系統関係で、兵庫県の「但馬系」、鳥取県の「気高系」、島根県・岡山県の「藤良系」の3代系統牛が中心となって改良されており、いわば、全国一律の同一系統の黒毛和牛となって来ています。特に種雄牛改良については組織的に力を入れている農畜産振興事業団種雄牛センター、都道府県の家畜改良センター、および民間で繋養している種雄牛は、改良基準の厳しい審査や種畜検査を経て牛群検定に合格し

た、よりすぐりの種雄牛だけが厳重な統制化のもとに精液配布となっています。しかし繁殖雌牛や交配種雄牛の精液の選択は農家任せで、畜主の好みによって自由に任されています。したがって母集団の遺伝子の維持は繁殖農家頼みとなっているので、繁殖農家の高齢化や経済的な影響から急速に繁殖農家の廃業が進み母集団の優秀な遺伝子を存続することが難しくなって来ているのが実態です。しかし、農家が黒毛和牛経営を左右する結果として子牛を高額で販売するためには、家畜市場で購買者や肥育業者が肥育しやすい販売子牛を効率的に産出することが最も重要であることから、繁殖農家の子出しの優秀な繁殖雌牛を繋養しなければならないのです。このことは、江田ご夫妻が42年間を掛けて会得された繁殖系統牛「たま系」の連産性産子の実績等から見ても明らかです。本来、全国和牛登録協会の黒毛和牛産肉能力改良の遺伝子の保留・固定・維持・の趣旨からしても系統牛の能力を最大限に活用しながら斉一した子出しの良い系統母集団に改良することが重要です。そのためには、都道府県の段階で頭数の少ない母集団の系統牛は自然淘汰して行くと思われしますので、都道府県毎に優秀な繁殖雌牛の系統母集団を選抜して3系統繁殖雌牛に絞込み、系統牛の母集団産地を造成しなければ優良な遺伝子を継続的に維持することは困難となって来ています。このことから、系統牛の改良方針は、繁殖農家に判りやすい内容で交配の組み合わせの目安をマニュアル化して、系統母集団の黒毛和牛振興を本格的に展開することが急務であると思います。

図1 江田牧場が繁殖和牛（たま系）に掛けた情熱の概要

年 号	西 暦	繁殖和牛に掛けた情熱の主な概要	主な賞 暦（県共・全共）	系統牛（○は、たま系）	情 熱 年 数
昭和42年	1967	・繁殖農家3頭（両親） す子牛2頭購入	・繁殖め		和牛取組 二人 三脚 31年 42年
昭和47年	1972	・ご主人と和牛繁殖二人三脚開始	<県共進会成績> ・優等賞4席 自家産	●第9えだしんもり	
昭和53年	1978	・県共進会出品（第1回目）	・1等賞首席 買い入れ	○たま系（第2なかたま）	
昭和57年	1982	・県共進会出品（第2回目）	・優等賞首席 買い入れ	●ひらはな	
昭和59年	1984	・県共進会出品（第3回目）	・1等賞3席 買い入れ	○たま系（第35たま）	
昭和61年	1986	・県共進会出品（第4回目）	・優等賞首席 買い入れ	●ふじひめ2	
昭和64年	1989	・県共進会出品（第5回目）	・優等賞3席 買い入れ	●いけみつ5	
平成2年	1990	・県共進会出品（第6回目）	・優等賞6席 自家産	●よしひろ3	
平成3年	1991	・県共進会出品（第7回目）	・優等賞首席 自家産	○たま系（よしたま8）	
平成16年	2004	・県共進会出品（第8回目）	<全共成績>	●おくひめ5の4	
平成13年	2001	・第8回全国和牛能力共進会岡山県選抜	・優等賞5席（雌牛群8区）		
平成14年	2002	・第8回全国和牛能力共進会出品(1回目)			
平成15年	2005	・牛舎増築と堆肥舎新築			
平成18年	2006	・畜産だより投稿 （牛飼い…夢を一つずつ）			
平成18年	2006	・第9回全国和牛能力共進会岡山県選抜	・優等賞3席（系統雌牛群4区）		
平成19年	2007	・第9回全国和牛能力共進会出品（2回目）		○たま系（よしたま8）	
平成21年	2009	・現在に至る（繁殖和牛4頭、育成1頭）			

図2 江田牧場の飼養状況および生産された子牛に「たま」の名号を付けた産子数36頭の概要

飼養状況 整理番号	繁殖雌牛名号 (頭)	生年月日	年齢 (才)	産子数 (頭)	自家保留牛		備 考
					産子目	名 号	
H13 廃用	第35たま	S60.6.20	24	15	8産目	第43たま	・平成12年度連産牛表彰 (全国和牛登録協会)
1	第43たま	H6.6.20	15	14	7産目	よしたま8	・平成19年度連産牛表彰 (全国和牛登録協会)
					11産目	たま15	
2	よしたま8	H15.5.15	6	5	5産目	よしたま8の5	
3	たま15	H18.5.15	3	2	0	—	
4	よしたま8の5	H21.9.30	3ヶ月	0	0	—	・自家保留予定
小 計	4			36			・現在たま系飼養頭数は4頭
5	第1きよみ	H16,11,3	5	3	0	—	・現在たま系以外飼養頭数1頭
合 計	5						